

季刊

# 連句

第44号

平成六年三月一日発行



季刊連句 第44号 目次

膝痛綺譚（南柏雜記 42） .....	1
新形式「源心」の提唱 .....	東 明雅 … 2
バツ通連句見聞録 .....	海野海砂 … 4
平成五年度の連句界 .....	東 明雅 … 8
歳旦三っ物 .....	10
第四十八回猫蓑会 .....	16
歌仙八巻 捌 東 明雅 内田麻子 上月淳子 雑賀 遊	
瀧川雅代 豊田好敏 八角澄子 仏淵健悟	
「馬追」付勝練習二十韻 .....	24
うらら会 .....	26
源心四巻 捌 東 明雅 式田和子 杉江杉亭 豊田好敏	
柏連句会 .....	28
二十韻三巻 捌 下鉢清子 五十嵐讓介 中田あかり	
近刊紹介 .....	9
雁帛往来 .....	29

# 膝痛綺譚

南柏雜記 42

雅

われわれは今まさに本格的老齡社会に突入している。そのことを私が痛感するのは、毎年行なう正式俳諧の役決めの時である。「私は膝が痛いので、正座できませんから」「どうも、永く坐っておれませんので」と言っただけで役を辞退される方が十人に三人はある。

何を隠そう、私も実は膝が痛かった。それは二年ほど前、ある朝、寢床の中で膝を曲げようとしたが、それが突然曲がらず、激しい痛みを覚え愕然とした。何かのはずみだろうと軽く考えていたが、その後、痛みは益々募り、遂に近所の整形外科にかけ込んだ。レントゲン検査のあと、「あなたの膝は永年つかって関節がすりへっています。これは治りません。一層悪くならぬよう注意して下さい」と言われた。

一方、私の棲んでいる猫蓑庵も、引越してから十二年、一度も畳替えしなかったで、何か床がぶくぶくして、根太が落ちるような危険を感じるようになった。それで懇意の大工さんに見て貰ったら、思い切った、書斎と居間の根太を取りかえる大工事になってしまい、その間、私は二階の寢室で坐って仕事をする生活が続いた。永い間、椅子に腰かけて膝を伸ばして仕事をしていたので、膝を曲げての

仕事はすぐ痛くなって最初は参ってしまった。ただ、その時、私のお尻の下には、名前は何と申すか正確には知らないが、俗に正座椅子と呼ばれるものが入っていたのである。この椅子を使うと、体重が直接曲げた両足にかからないので、痛みが随分軽減される。工事は二十日間続いたので、その間、私は辛抱しながら正座して仕事を続けたのであった。

そして、遂に工事完成の日が来た。畳を取り払い、頑丈なフローリングを張った書斎は生き返ったように見えた。何より嬉しかったのは、松本で使った当地へ運んで来た幅一間半、高さ一間半の大書棚、これは畳の上では立てられないので、これまで上の部分と下の部分が分かれていたのが、十二年ぶりに昔のように一つになって、西側の壁に聳え立ったことであつた。そして、その夜のこと、ベッドに入った私は何気なく脚を伸ばして、何の痛みもないことに気がついて驚いた。夢ではないか。そっと曲げ、また伸ばしてみる。不思議である。痛くない。私の膝は治つたのだ。こう気がついて私は呆然となつた。

右の話は全く嘘偽りのないマジである。工事のためしばらく正座して膝を曲げ続けたのが、逆によい効果となつて、膝が痛みなく屈伸できるようになつたのであろうが、きっと私のように正座しなかつた為、膝が痛くなつた方が世の中には大勢いらっしゃるだろうと思うので、世のため人のため、ささやかな体験談を申し上げる次第である。

# 新形式「源心」の提唱

東 明 雅

私が新しい連句形式として「二十韻」を考え、発表したのは昭和五十九年十二月のことであった。それから約十年、二十韻は忙しい現代生活にマッチした新しい形式として、多くの人に愛用され、ことに猫養では、たっぷり時間のある時は歌仙、二、三時間で首尾したい時は二十韻と、自ら使い分けるようになって、既に数々の名作も生まれ、いわば連句の世界にすっかり根をおろした格好になっている。

ただ、人間は贅沢なものだから、歌仙をやるだけの時間はないけれども、二十韻ではどうも物足りないという、具体的に言えば、歌仙は四時間以上かかるけれども、二十韻は二、三時間で終る。その中間、三時間以上、四時間以内の時間的余裕を十分堪能できる形式が欲しいというのも当然のことである。

そこで今回、考えたのが源心という二十八句のあとに示すような新形式である。

もともと、私の歌仙四時間説は季刊連句第三号に述べている通り、表六句に三十分、裏十二句に一時間半、名残の表も一時間半、そして、名残の裏に三十分、計四時間であったし、二十韻はこれも季刊連句第八号に述べているが表四句は二十分、裏六句は一時間、名残の表一時間、名残の

裏二十分、計二時間四十分の計算である。もちろん、この数は目標とし、理想とするもので、現実では必ずしもこの通りには参らぬであろうが、大体の目安としては妥当なものであろう。

その計算で、源心を考えると、この二十八句、表四句は二十分、裏十句は一時間半、名残の表十句も一時間半、そして名残の裏四句は二十分、計三時間四十分であり、三時間以上、四時間以内の時間的余裕があれば、まずまず可能な形式であると言えよう。

考えてみれば二十八という数は、三十六（歌仙）と二十（二十韻）の丁度、真中の数である。昔から二十八宿という形式があつて、それは表六（五句目月）・裏八句（七句目花）・名残の表八句（七句目月）・名残の裏六句（五句目花）であるから、源心はこの二十八宿の一変形とも考えられるところである。

しかしながら、私が思うに、連句一巻のおもしろさは序・破・急とある中の破の段で、序（表）と急（名残の裏）はともに必要ではあるけれども、それほど凝ったものを出す必要はない。それよりも破一段（裏）と破二段（名残の表）に十分な句数と時間を割いた方がよいというのが、二

十八宿から、敢て源心を考えた根拠である。

因みに源心というこの名稱は、この形式をはじめて披露したのが、平成五年十一月二十四日、江戸川区行船公園の中の源心庵であったことに由来する。この会では一座二十人、四卓に分けて、この新形式で興行したが、突然はじめの形式にもかわならず、捌きも連衆も、何の惑いもなく、十一時から昼食を含め、四時前後にはめでたく首尾したのであった。次にかかげるのは当日の私の作品である。

冬紅葉

潮入の池の波紋や冬紅葉

四温日和に集ふ連衆

クリームを角の立つまで泡立てて

画集の届く午后の宅配

半月の兎は何処と子の問へる

踊終って迎る野の路

新走り酔ひし脳裡に人の顔

教へてくれぬ電話番号

蚤の市アンティークジュエリーじゃらじゃらと

サンピエトロは鳩の遊び場

日雇の男に夜は明け易く

六神丸のほろ苦き味

踏みこみの畳のへりに花散りて

庵主ひっそりかげろふの中

くり返しテープで習ふ茶摘歌

明雅 捌

孝子

美津

遊

和代

庸子

明雅

孝

庸

津

遊

孝

代

遊

庸

代

研修旅行サロンバスにて

雪しまく妙義山容黒々と

蒟蒻農家かさむ借財

路は支店長より本店へ

ちよっとお尻を触る上役

羅に抱く命のあえかにて

門を閉ざして籠る世阿弥忌

日本海月に漂ふ漁り舟

稲架の形の変る峽ごと

やうやくにメビウスの輪を抜け出して

デル・デス・デム・デン覚えうららか

花盛り空より笑ふ鬼瓦

風船売りの道に一服

平成五年十一月二十四日

於 源心庵 首尾

源心	裏	表	初折	裏	表	名残の折
	四句	十句		十句	四句	
				折立		
				九句目		
				九句目		
				三句目		
				花		

孝 津 孝 遊 庸 遊 代 遊 庸 雅 代

## パソ通連句見聞録

海野海砂

五・六年前、O・A（オフイスオートメーション）化の波に周章でふためくオジサンたちの姿をTVでご覧になったことがありますか。退社後のコンピュータ・スクールで、困惑と疲労のため朦朧とした表情の中高年の人達を、同じ境遇の者としては涙無くして見ることはできませんでした。

その五・六年前のこと、ナード（コンピュータおたく）と呼ばれるマニアックな人たちや、人恋しい高校生の弄玩的メディアだったパソコン通信が、やはりTVで紹介されました。自閉的な若者の風俗としてやや疑問の体で扱われていましたが、幼児の喃語のごときやりとりを見てなんてこったと思っただけでした。

この小文も、通常のパソコン通信で普通に用いられる文体に倣っています。親しみを表出するために記号文字を組み合わせたニコニコマークやら泣き笑いマークなどを挿入しますが、いい年をして恥ずかしいので筆者はそれをやりません。

ビートたけし氏の毒舌の餌食になったりする、そのパソコン通信が、ようやく一般的な情報源に育ちつつあります。銀行や図書館などのオンラインシステムが汎用化されたものと言えば想像して頂けるでしょうか。「パソコン通信・アクセス・ラム・ロム」などの用語が広辞苑の第四版から

見出し語として収録されていることからみても、もはや玩具の域を脱したとみてよいでしょう。

新聞雑誌TVなどに次ぐ第四のマスメディアと呼ばれるには未だ蓄積が乏しくて、道は遠いけれど、先行メディアとははっきりと異なる性格があって、それは編集者の意図する加工をほどこした二次情報ではなく、未加工の一次情報だから、より真実に迫る機会が多いだろうと期待されるところです。

ニュース性は他へ譲るとしても、データ・バンクとして、さまざまな分野の情報が整備されてゆけば、法令集、判例集、百科事典などの大部冊の書籍で高い家賃の事務所を埋め尽くすことはなくなるだろうし、文書の山は塩煎餅ぐらいのC・Dに収まってしまふ。音声や画像が加わるマルチメディアが目前ですから、異性のリストから相性のよい伴侶を選ぶなんて事もできそうで、関係ない身の上ながら欣快にたえません。

メーカー系、新聞社系の大ネットワークから町の手づくりネットまで大小二百を超えるネット局があって加入者数二百万人だそうです。重複を除いてもざっと百万人が電話線を使いホストコンピュータを相手にしこしこやっているわけ、そのメニューは科学・医療・福祉・教育・技術などの専門情報から、文学・絵画・音楽、果てはグルメ・占い・競馬

予想まで多岐にわたり、その一つに連句も常設されています。連句のメニューが大ネットに限らず小ネットにも広がったのは、ここが肝心のところですが、新聞雑誌TVが一方向メディアなのに対し、パソコン通信が同時相互方向メディアであることで、この特性が連句には詠えたようにびったりなためです。将来にわたって連句人を増やし続けるにちがひありません。

好きな時に読みに行ったり、書きに行ったりするほかに、申し合わせて進入し一部屋を占領してやりとりをすることもできます。企業が支店網を招集して会議をするのに適した装置ですが、これなら運座と異なるところはなく、即興の付け合いを野次や罵声とともに応酬する趣は楽しいものです。

ただしこれは別途料金がかかりますので電話料ともに三時間の費用はおよそ四千円ほどになり、いつでもというわけにはいきません。

そこまでやらなくとも通常の通信（公開通信、ボードと呼びます）で、文音と運座の間ぐらゐの感興はあるもので、ことに投句に添えて発信される雑談に対して、取り巻く座談の名手たちが寄ってたかって盛り上げるおもしろさは大へんな魅力です。

と、ここまでは良いことづくめですが、連句の質の向上となると疑問の点もあります。ナアニ、層が厚くなれば自然に質も向上するさ、と弁証法的に樂觀することもできませんが、東明雅先生のご心配（第四一号以下）を拡大するこ

とがなければよいが、といたいけな胸をいためています。

お察しのとおり行きずりの者同士で連句を巻くものだから師弟関係が生まれるわけではなし、方向を定めて指導し指導されるという状態にはなりません。ことさらに対等であることを求める気風が強いから、さまざま主張を併呑しながら進んでゆくので悪くすれば外道、良くても横這いのままに終始するかも知れないと、杞の国の人は憂うのであります。

筆者が出入りを許されているのは、PCIVANとBNetの二つにすぎないから、パソコン連句の状況は、と言って概括するわけにもいきませんが、見聞きした範囲で記してみましよう。

加入者六十五万人のPCIVANの場合は、『電脳連句で遊ぶ』の著者林義雄・辻アンの両氏や仏淵健悟氏らがいて、これら猫蓑流の申し子たちが蕉風俳諧を志していますから、テクストに厳格な気風をもっています。どのよう展開するとしても基礎の学習は押さえておこう、という考え方のようで、ここは大いに賛意を表しておきたいところです。

工夫の要る点は、いわば通りすがりの人を「面白いよ」と言って引き込むわけだから、つまり志をもってやって来るとは限らないから、困難な式目の学習をさあやれとどやしつけるわけにはいかず、さりとてそこを通らねば話にならないところです。

そこで、わかばマークの人に用意したのが「自由連句」

と称する、あらゆる約束を取っ払った百韻で、

酒提げて師を問ふ弟子ぞ有難き

見たうもないはケーキに饅頭

いやしかし饅頭恐いの例もある

酒饅頭なら文句あるまい

このおらかな応酬ぶりですから警戒心もあらばこそ飛んで火に入るなんとやらとなります。そして次ぎなるステ

ージは、ゆるやかな式目による、賦物連句でステツプアッ

プします。人気の高い賦物には次のようなものがありまし

た。(二条良基氏は句柄が悪くなると言って賦物に反対し

ていますけど)

回文二十韻

疎いけど老母過ごす時は時計塔

春風のもと友の背借るは

今朝皆は田楽囃んで花見酒

五音折句二十韻

秋めくや聲掃き終へて美しき

多のころ草の躍る風道

初月夜久方ぶりの舟宿に

瓢箪なまづ幫間の世辞

父曰「山鵲鳴けばめでたし」と

(白山石楠花)

酒いとうまく酔ひてさうらふ

唄声す見れば鬼ども月見宴

坊

海

奈

阿

悟

幽

海

悟

幽

海

悟

幽

海

悟

幽

海

悟

幽

海

悟

幽

海

このような言語遊びを楽しみながら初步の式目に馴染んでゆくと、常設されている歌仙の席で、捌きと連衆が時代めいた用語でやりとりしている式目論議や、文語文法や、歴史的仮名遣いや、古俳諧の評釈やら、ときには母音調和などと言語学のレクチュアやらが自ずから身についてくる。

(筈です。と言うのは長年自由連句ばかりという意志堅固な人もいるから。)

このようにして連句の柵にはまりこんでゆく人が後を断ちません。PCIVANの連句は盛況と言って良いでしょう。

一方、閉鎖的なサロンと化してしまい、通信が滲れてしま

うケースもあります。

BINETは五十人ほどの小じんまりしたネット局ですが、ここは若い作家や編集者が集まって、新刊書の書評や、詩の評論をすることが中心テーマです。

数年前には作品集「祈念祭」を出すほどにパソ通連句が盛んでした。作風は、表現者の意地のようなものが漲って

いて独立した一句としては目を見張るものがあります。一巻の構成のうえで制御不能に陥っている様子があります。

底力のある集団ですから構成上の指揮が強化されれば優れた一座となることでしょう。

すぐれて時めきたまいしが、盛んにすぎてその果ては、パソ通連句にあきたらず、と七五調になることもありませ

んが、連句は一座してやるに限るとばかり、即興感応の運座に魅入られてしまいました。そうなると働き盛りの年齢



層ですからそうたびたび集まることもならず年に二三巻という地味な活動で、オンラインのほうはすっきり洩れてしまいました。このあたりにパソ通連句の限界があるのかなあと感じます。

切磋琢磨して向上するためには忌憚のない応酬がなければなりません。それには難しい点があります。パソ通では、不用意な言辞が感情を逆撫でしたとき、刺さった刺を抜いて修復することが極めて困難です。顔や肉声を知らないということが、これほど多く人間関係を損なうものかと驚くばかりです。そこを乗り越えなければなりません。ついで腰が引けてしまいます。論議と人格は別と言っても、プロ同士ならともかく市井の人間士では言って良いことと悪いことがありますから。このような事情があって、パソ通連句の中核となる役割はP C I V A Nの自由連句に見られるように初心者オリエンテーションにこそあるのではないかと思われまます。そこで展開する付け合いがいかにかに稚拙であっても座の文芸の面白さを伝える限り文芸上の誇りある役割となるでしょう。徒に功を争って私闘の場にしたあげく、ボードが洩れてしまつてはどうにもなりません。あたかも、詩人の書を詩人が読み詩人が評して、詩をサロン化し、大衆から詩を収奪した前車の覆轍のごときを、頂門の一針とすることでしょう。(と、やたら難しい言葉を並べる)

なによりも若年層の参加が望まれるわけですから、B I N e tのような若い人に人気のあるボードで連句が洩れるのは残念の極みです。復活を切に願っています。

もうひとつパソ通連句の可能性について夢があります。百万人規模のメディアですから相互乗り入れをして全国ネットとなり、そこで付け合いをやることです。これを小規模ながら実験をした作品があります。

ドンド焚く朝文焼きにけり  
雲仙や長き眠りの覚めつらん  
魚(中日)  
幽(PC)

笙(道新)

三日月細き入梅の空

未知の人の付け合いなので、やたら気取っているところが可笑しくもありますが、この試みには大変に感銘を受けました。このことを敷衍すれば、海外の人達との付け合いもできるわけで、そのことは、カナダに赴任したP C I V A Nのメンバーとの交信で実験済みです。オクタビオ・パスは裸で人の中を行くように恥ずかしかつたと言っていますが、パソ通連句なら姿は見えませんが恥じらいを越えて連句に馴染んでくれるのではないのでしょうか。

大きければ良いかと言えば、オデキと食い物屋は大きくなるとツブれると言いますが、連句もそうならなければ良いが、と一方では危惧されます。つまり教条的な守旧派から破壊的な前衛派までが入り乱れるわけで、制限や禁止ばかりに拘って前進しなかったり、前衛の美名のもと暴走したりしかねないところがあって、それは指導者が睨みを利かせる結社連句とは異なるところでです。

後世への罪人となるか、賜物となるか、パソ通連句もまた、新しい連句への模索が始まっています。

## 平成五年の連句界

東 明 雅

平成五年の連句界は前年に倍増して賑やかであった。全国規模の行事が前年は五であったのに対して、当年は九を数え、出版物も夥しい数に上った。最も嬉しかったのは、連句人口の増加、それも地方、そして二十代・三十代の若い層の作家が増えて来たことである。この盛況をもたらした原因は幾つも考えられるだろうが、最大のものとしては、平成二年初めて連句が参加するようになった国民文化祭の影響であろう。この大会が全国を一めぐりした時、連句復興は本当に実現するのではあるまいか。兎に角、十年前からは想像も出来ないような盛況であった。例年の通り、その実状を項目別に列挙する。

### 一、行事

- ① 一月二十四日 現代連句シンポジウム、東京九段下のグラントパレスで開催。その実況と作品とは「俳句研究」四月号で発表された。
- ② 六月十三日 連句協会第十二回全国大会。北区赤羽会館ホール。
- ③ 七月二、三日 全国連句いなみ大会。富山県井波町総合文化センター。
- ④ 九月三、四日 全国連句新庄大会。山形県新庄市新

庄市民プラザ。

- ⑤ 九月十五日 連句を楽しむ会。京都法然院。
- ⑥ 十月十、十一日 第八回国民文化祭いわて93協賛全国連句大会。
- ⑦ 十月三十日 豊田連句恋々まつり。豊田産業文化センター。
- ⑧ 十月三十日 第二十一回俳諧時雨忌。飯田橋家の光会館。
- ⑨ 十一月二十五日 芭蕉翁三百回忌追善法要。大津義仲寺

### 二、出版物

- ① 磯直道・日笠靖子著「去年今年」。一月刊。両吟三十六巻。
- ② 東明雅編「猫蓑作品集Ⅲ」三月刊。平成四年度の猫蓑会作品八十六巻。
- ③ 岡本春人編「花下微笑」三月刊。歌仙・源氏行・世吉・居待・出花・百韻・十二調など計百巻。編者は刊行の日を待たず平成四年十月他界。監修の阿波野青畝も同年十二月逝去。青畝・春人師弟の作風を知るには

最高の書。

④ 別所真紀子著「言葉」を手にした市井の女たち  
三月刊。近世女性の俳諧を初めて研究した書。

⑤ 下房桃庵編「俳諧やみつくば」三月刊。千字文千句  
をはじめ百韻・歌仙など三十六巻。

⑥ 磯直道著「葉月会連句集」五月刊。歌仙二十五巻。  
磯直道著「鍋奉行」八月刊。歌仙二十六巻。

⑦ 赤田玖實子著「蕉風俳諧連歌」十一月刊。論文と作  
品、歌仙・百韻・十八行・十三仏行など計六十九巻。

⑧ 連句協会編「芭蕉翁三百回忌追善俳諧集」十一月刊。  
第十二回全国大会の作品二十三巻と、結社別追善作品  
七十二巻。

⑨ 鈴木漠編「虹彩帖」十一月刊。歌仙・半歌仙二十五  
巻。

⑩ 全国連句いなみ大会入選作品集。七月刊。歌仙八十  
八巻。

⑪ 全国連句新庄大会連句集。十一月刊。半歌仙・二十  
韻二百十三巻。

⑫ 「連句年鑑」・「連句協会々報」。平成五年版は十  
月刊。会報は隔月配布され、それぞれ連句界の行事・  
作品を報道。

⑬ 主要グループ発行誌。連句研究会「連句研究」は十  
月の一〇八号で終刊となった。「俳諧接心」は十二月  
で五四九号。「季刊連句」は四三号である。新しく同  
人制連句誌「れぎおん」が四月創刊され、八月に第二

号、十一月に第三号を出した。主宰は窪田薫、新しい  
形式の作品を中心に、いろいろ実作上の問題を提起し  
て気鋭の論文を収めている。「都心連句」は十一月、  
二一号を出した。

その他、俳誌「白燕」・「獅子吼」・「草莖」・「あし  
た」・「かびれ」・「未来図」・「摩天樓」なども、それ  
ぞれ毎号、連句関連の作品・記事を掲載している。

さらに、既に述べたように総合俳誌「俳句研究」四  
月号に「詩人による公開連句」として、一月二十四日、  
現代連句シンポジウムで作られた半歌仙「初昔」の巻  
が掲載されたが、これには批判もある。

また、芭蕉没後三百年を記念して「国文学解釈と鑑  
賞」五月号には芭蕉の連句・七部集が取り上げられた。

三、消息

昭和五十六年の連句懇話会の創立者で、而後、連句協会  
々長を勤めて来た阿片瓢郎は健康上の理由で勇退、大林柚  
平が新しい会長となった。また、大林柚平は抱虚庵七世で  
あったが、庵号を弟  
子の土屋実郎に譲り、  
その襲号披露の会が  
深川富岡八幡宮で行  
なわれ、多数の人が  
参列した。

近刊紹介  
一、連句猫蓑作品集 IV  
一、芦文翁俳諧聞書  
いずれも三月前後出版の予定

歳 旦 三 つ 物

犬吠岬いぬほしや波きらきらと船起し

ごまめ数の子直会の酒

未開紅白磁の壺に投げ入れて

古稀となる妻の抱きし紅破魔矢

北極越えて初便り来る

枕頭に句帳拵げて深睡り

初空や狺犬すくと立ちあがる

夢に波濤の宝船漕ぐ

三枚に乙女椿の葉を留めて

初雀犬君の逃がす籬かな

かがり手毬にこもる波音

おぼる夜のナイル川岸權とりて

蓬萊の仙女は松が根を枕

波音聞きつつむすぶ初夢

レトリバー雪解けの道みちびきて

東 明 雅

青 木 琢 也

秋 元 和 彦

秋 元 正 江

浅 賀 淑 代

三代の顔の揃ひし年始め

かはるがはるに鳴らすぽっぺん

春の虹湖より丘へのび行きて

聖名祭筒袖着たる亡命者

ハーブ浮かべて福茶一服

嘯りの峰より峰へ渡るらん

産土や古りし狺犬初詣

楪飾り白き昼月

夢の橋渡れば花の霞むらん

梅が枝に、末吉、結ぶ初詣

歌留多の小町引目鉤鼻

恋猫の嬰泣く如く月の夜に

黄金のジパングなれや初景色

御慶の馬を並めて甲比丹

春暖炉執筆余話のきりもなし

市野沢 弘子

岩 井 啓 子

内 田 麻 子

梅 田 利 子

大 窪 瑞 枝

初市や雪はしづかに地にかへり  
玩具の指輪あたる宝引  
縁先に飼ひ鶯を鳴かせらるて

キューポラの街に住み馴れ年新た  
レスキュー隊の出初はなやか  
春の風琴の調べを運ぶらん

火の色に引かれ郷社や初詣  
神酒にほろ酔ひ恵方道行く  
男の子孫の誕生報せきて

初凧や伊豆七島は視野の中  
陽矢煌めきて渡る元朝  
万葉の短歌連吟大らかに

来福や白求火の波人の波  
淑気さやかに聴きし松籟  
春拾野点一服饗されて

初富士や海を鏡の濃化粧  
つい腰据ゑる年酒の客  
喜寿の春猫も衰着て祝ふらん

織田 康子

小野 シズ

加藤 治子

加藤 道子

神谷 安子

蒲原 志げ子

波に描く黄金の道や初日の出  
賀状の端に記す犬の名  
連凧に夫の笑顔のつらなりて

大島に白波立つや初景色  
礼者の膝に甘え寄る犬  
春苺一粒選りにもぐならん

元旦やけふのいのちに遭ふ不思議  
育ち盛りの競ふお雑煮  
雪積みぬ瓦礫に草に木々の芽に

戌の春六たび迎ふ誕生日  
国中みんな祝ふ屠蘇酒  
かぎろひの大波小波たはむれて

くにぶりを夫と共にす雑煮かな  
年始の客の桐下駄の音  
影おぼろ陶俑の鬢匂やかに

松羽目に自づからなる淑気かな  
椅子に置かれし白き手袋  
もとはれり雀隠れを踏みしめて

倉本 路子

上月 淳子

河野 玄麿

小林 千雪

米谷 貞子

雑賀 遊

年立つや犬のタローと共白髪

雪国の藁にほふ輪飾

春の潮出港の銅鑼高らかに

朱塗りの破魔矢をかざし巫女の舞ふ

茅の輪ひときは日枝の御社

三絃に耳傾ける犬のゐて

むさし乃の空ほのぼのと初明り

参道を行く破魔弓の鈴

床の間にデージの鉢飾られて

書初や我が名つくづく書きにくし

宵の年には立ちし小波

犬の仔のまことしやかに座りゐて

お正月富士くつきりと波の上

磯風ゆらす船の輪飾り

焙炉場家族総出で茶を揉みに

この道の深く遠しや初筑波

御慶御慶と鳴くは何鳥

ニューヨーク孫誕生の便りきて

坂本孝子

佐藤正秋

真田光子

式田和子

茂田キヨ子

篠原達子

愛犬の綱新しや恵方道

垣より洩るる弾初のチェロ

たびら雪シェリー酒を酌む夫とゐて

初日影犬のリボンの蝶結び

カメラアングル子らのかまくら

花の奥極めん旅をまた夢に

初凧や墨絵に紛ふ伊豆の山

船起しする浜の人々

犬連れて散歩する道のどらかに

吠え過ぎる犬もてあまし祝太郎

大き顔して狎も正月

波光る餘寒の浜を駈くるらん

たぎつ湯に聴く松籟や初点前

勅題菓子の盛らる大皿

一本の梅馥郁と香るらん

初鶏や上海ねむる闇の底

春着に着替へ走る自転車

梨の花少年姉にはにかみて

下坂元子

下鉢清子

杉江平朗

杉山壽子

須田智恵

高橋豊美

万太郎

移り来て何やらゆかし初景色

淑氣満ち満つ富士の高空

春の卓「源心」の座を囲むらん

初伊勢や真珠筏に波やさし

福餅さげて年賀挨拶

どこまでも酉追ひかける戌つれて

初晴や機影忽ち点となる

ビッグボードに淑氣満ちみつ

花一枝こころ捧ぐの文添へて

初東風の沖見据えつゝ船出せん

屠蘇くみ合うて折る豊漁

雀鷄に笹子も混り梅が枝に

海原を弾み出でたる初日かな

玻璃のギャルリに結ひし輪飾り

花心童女のまゝに遊ぶらん

初日の出金波銀波を煌めかす

二見の礁飾る注連縄

客まうけ大吟醸を賜はりて

瀧川 雅代

武村 利子

橘 文子

土屋 実郎

椿 紀子

富田 一青子

まゆ玉や人のこゝろの照りかけり

十六むさし歌留多雙六

薄氷に仔犬ひたすらはしやぎめて

おぼろ月追ひまたはしご酒

初春や喜寿を迎へん老書生

家族揃うて祝ふお雑煮

おらが街とよあけの風光るらん

屠蘇くむや生ける証しの祝箸

赤姫眩し飾り羽子板

沖繩の花ほころぶと便りきて

初景色富士江の島を右左

波しづかなる歳旦の海

花みづきそのかみの人俣ばれて

初日の出あびてのどかに眠る猫

風さはやかに羽をつくりら

大金を拾った夢にうなされて

お正月唄の外より羽根の音

淑氣漂ふ床の水仙

初午の祭の用意整ひて

中川 キヌ

永坂 博美

中田 あかり

中島 啓世

中島 まさし

成田 玲子

肅肅と庵に届く初茜

はこべらを摘み居すわる椋鳥

春の海法華経唱ふ波ならん

初景色能登の祿剛の波の花

飾海老には添ふる橙

遅き日を出世力士と酒酌みて

シャンパンを抜きて御慶を交しけり

初便りせむ旅の絵葉書

臥竜梅天地の氣に香るらん

命得て七度びの干支めぐりきぬ

矩を躰えずに屠蘇も小盃

闘へと春の疾風の猛るらん

水底に小さき生命や初鵜川

波間に下ろす權淑氣満つ

うららかに五言絶句をよみあげて

ほうらいの山まつりせむ老の春

ふくら雀の遊ぶ福藁

花淡き月夜鼓の緒を締めて

根津美紗

八角澄子

原田千町

福井隆秀

船渡文子

櫻岡素子

星野蕪村

読初や机直して去来抄

串柿をそへ飾る御鏡

狗嬉嬉と野は春光の溢るらん

元日や猫も聞きある誓ひ初め

屠蘇いただいて向かふ大空

雪解風米は良かれと吹くならん

東雲の空紫に初詣

若水満たす雅びなる玻璃

音色よき鶯笛を吹き合ひて

初春や漲り寄せる時の波

加速度つけて躍る追羽子

蓬籠大地がちりと踏みしめて

唐墨の香りふくいく初硯

五形蘿蔔七草の籠

きらめくは針魚の群の波ならん

雲海の波たゆたひて初茜

新春を祝ぎあげる乾杯

三代の記念撮影うららかに

細川研三

佛淵健悟

町田順風

峯田政志

村田富美

本屋良子



八代 良子

初釜や多摩に住まひて十五年

花びら餅をねだる老犬

卒業生留学の夢きりもなし

山口 瑞枝

ゐながらに愛づ初富士や三世代

ワンと御慶を申すブードル

小波の渚咲きはふ花ならん

山田 歌子

若水やふくめば五体廻り

三河万歳老いて鬢鏤

百千鳥一日溪の明るくて

歳旦三つ物について

平成六年元旦に、私が頂戴した歳旦三つ物、それに、私が差し上げたものも加えて六十四篇を御披露する。実を申せば、私も従来三つ物を作ってはいしたが、賀状に書いて差し上げたのは今年が初めてである。自分で出して始めて分ったのであるが、歳旦三つ物の賀状ほど、その作者の全体を表現するものはない。これほど心の籠ったものはない、また、これほど簡便なものもない。

正月の挨拶をそのまま文学に作り上げた我々の先祖の叡智に感心しながら、来年からも生きていく限り、作り続けようと思った次第である。

\*「灰汁桶の」の巻鑑賞は、紙面の都合で割愛しました。

吉池 保男

初鶏に耳傾けり犬張子

凧のうなりを運ぶ川風

春野行く旅人の背に日の射して

吉村 恵美子

吉野が里村長祈る国の春

淑気あふれし妻のえみ顔

凧日和波打ち際を犬つれて

若尾 よしえ

霜畳淑気みなぎる観音堂

句碑に御慶の藜杖を曳く

船起し小鯛の酢漬け銘々に

◎「季刊連句」に左の方々より、御芳志をいただきました。

ました。有難くお礼申し上げます。

一金 三万円 連句 教室 様

一金 三万円 柏 連句 会 様

一金 一万円 ころも 連句 会 様

一金 五千元 桃 雅 会 様

一金 二万円 根 津 芙 紗 様

一金 三万円 綾 の 会 様

一金 五万円 猫 蓑 の 会 様

一金 二万円 源 心 庵 の 会 様

第四十八回 猫 蓑 会

歌仙八巻 参加者五十三名

平成六年一月十九日  
於 江東芭蕉記念館

傘 齡 や

東 明 雅 捌

傘齡や新年古き酒五升

初占に出でし幸先

佇めばま白き蝶の舞ひ立ちて

凧合戦の父と子の夕

朧月鉄橋を行く貨車長き

モーツアルトの曲に和める

タイ料理「トムヤムクン」に時間かけ

心ひかるる母に似しひと

襟留めにきらりと光り黒真珠

短夜のはや明けそむるなり

誘はれて葵祭りの人混みに

箱師修行の新入りの弟子

尾がすこし見えてゐるなり穴惑ひ

分水嶺にかかる満月

そぞろ寒平仄脚韻ままならず

やや濃くしたる珈琲をのむ

洗礼のごとし落花を受くる群

グラバー邸にもゆる陽炎

明 雅

啓 世

央 子

守 英

ますみ

歌 子

碧 子

み

碧

世

歌

英

歌

央

世

歌

央

み

レガッタに賭けたる遠き若き日よ

声も出でざり不況解雇に

突然に西海岸を襲ふ地震

冬至の粥の卓にこぼるる

茶懐石デルフト焼きの鉢つかひ

騎馬民族の末の語部

すりきれた箒を使ふおしらさま

潜り戸の鍵そつと開けをく

手術したあとも癒らぬ恋病ひ

われからと泣くひとを見放す

稜線の青きほのめき居待月

ロカ岬にて秋惜しむなり

長電話老いし親もつ同志にて

仏法僧のしきりなる声

天瓜粉湯上りの子ははねまはり

キャンパス据ゑて画を描く午后

京の奥常照皇寺は夢の花

築にきらきら若鮎の群

英 央

碧 子

英 世

碧 子

み

碧 子

英 世

歌 子

央 子

碧 子

世

同

碧 子

央 子

雅 子

碧 子

央 子

碧 子

弾 初 め

内 田 麻 子 捌

弾初めのショパン・シューマン・ドビュッシー

タフタの春着淡きとき色

観覧車笑顔あふれて廻るらん

鳩と雀が餌をついばむ

夕月を映す川瀬の街はづれ

真緒の薄手折りつつ行く

秋場所を湧かせ小兵の力士達

デート忽ちフォークスの種

あの黒子さはってみたい今宵こそ

五日並べが一寸詰って

真砂町こんにやく閨魔賑はひぬ

肌身離さぬ貯金通帳

スチエワードジョッキ軽々窓に月

デッキプールに渡るそよ風

武器を売り石油を買って中東に

これは重宝軒防止器

現代の花咲爺と気負ふ父

何時の間にやらあしたばの殖え

麻子

瑞枝

文子

久美子

治子

光子

治

光

久

瑞

文

光

久

瑞

同

光

文

麻

磯伝ひ穴あちこちに望潮

噂話のつづく海女たち

兄弟チャンネル争ひJリーグ

出無精の猫庭をうろつく

抱かれ居る指ゆっくりとほどかれて

夢に消えゆく雪女郎なり

ポケットのホカロン三つ固くなる

社鎮まり献茶お点前

京菓子の老舗奥行どこまでも

ヤングファッション破れジーパン

傘の中明るさありて月にじむ

もやへる舟に小鯛を焼く

漫画年齢だんだん上る西鶴忌

昔鬨士も白髪まじりに

ずっしりとカードが重い吾が財布

護謨風船の束を飛ばして

花吹雪友とはるけき旅に浴ぶ

羽を休める蝶は紫

文 瑞 光 久 凡 光 瑞 文 治 光 同 久 治 瑞 光 久 凡 光 瑞 文

初 荷 旗

上 月 淳 子 捌

初荷旗立てて大川舟上る

女礼者の渡り行く橋

春障子唐墨ゆるゆる磨るならん

卒業試験やと終はりぬ

月の膳鱒づくしにてととのへし

猫のずらせるゴミ箱のふた

かくれんぼ置いてけぼりで泣き出した

夫婦別姓どうするか籍

夢見酒寝返るといふ恋もあり

技の多いが自慢小相撲

ライトアップ城くつきりと浮かびたる

鶺鴒ゆらぐ秋興の月

貞奴の墓に供へし青瓢

そぞろ寒しとかき合はず袷

百万円切った外車の試乗会

ニホンカワウソどっこい生きてた

花盛りからかさ連ね見得を切り

菜飯青饅届く弁当

淳子

清子

政志

達子

徒司

代々子

紀子

志子

清子

紀子

淳子

清子

司子

達子

代子

達子

紀子

達子

鐘霞むコタンの丘を雲流れ

身ぬちに騒ぐマラーの曲

家出して地下道暮し幾月ぞ

若さの飾り腰の鍵束

ビール酌み男心の捨てどころ

狂ひし妻を彫りし灼け石

遺せしは付け一山と隠し子と

千手観音笑みておはせる

炉話の佳境の端に修道士

不老不死なる薬もとめて

宇宙船玉兎想ひて速度あぐ

針の如くに落つる流星

柿熟るるはらから集ふ父の忌に

棋譜をならべて腕ぐみをする

うろうろと日がな一日捜し物

切手があがり音をあげるなり

新邸の若木の花の咲きそめて

スケッチの筆暮れかぬる頃

清志

司代

清代

清志

志司

達清

清紀

清代

清紀

清代

清達

清代

清達

紀代

代司

司代

淳志

志淳

弓 始

弦音の清々しかり弓始  
 少し干反りし注連の櫛  
 春障子開ければ猫の入り来て  
 文具揃へる進級の児等  
 月まどか雪間の土のやはらかき  
 久の集ひのいとも賑やか  
 重ね合ふ洋酒のグラスクルーザー  
 君を夢みて万里往還  
 聖観音一千年の笑やさし  
 絵団扇遣ひ縁先の父  
 マラリヤの忘れた頃に現れる  
 P K Oは何処なりとも  
 夜鴉の急に鳴き立つ後の月  
 葛のかづらの足にからみて  
 二科展へ自画像しよって搬入す  
 デイスカウトのカメラオーデオ  
 宮様のお手植ゑなざる花若木  
 お城の鯨に飛ばす風船

欣 壽 淑 一 千

遊 町 惠 代 子 二 町 二 子 代 惠 町 同 同 代 町 惠 同 子 町 子 町 子  
 きしめんネの店を抜け出し陰参り  
 せめて次官になってみせると  
 地球上はびこる人間バクテリア  
 ダンボールハウス並ぶ浴道  
 「松の針」賢治の詩読む冬の旅  
 てまひまかけて探る埋火  
 そりゃあんたお金くれれば抱いてやる  
 破鍋綴蓋共に気付かず  
 唐傘のお化けびよんびよん跳ねて出て  
 そちらこちらに禁煙の札  
 ホスピスの窓辺に佇てば月蒼し  
 シャコンヌの曲身に沁みる頃  
 牧閉ちす最後の馬車が門くぐる  
 昔々の話せがまれ  
 教会のステンドグラス影落す  
 チェッカーゲーム負けたことなし  
 太郎冠者御前に候花の宴  
 蜂飼憩ひ望む山脈

雑 賀 遊 捌

二 遊 代 同 子 惠 二 代 惠 同 町 二 代 二 惠 町 惠 代

初 東 風

初東風や百の鷓鴣翔てる竹生島  
 淑気満ち満つさざなみの湖  
 チェリストの練習曲を春窓に  
 友の差入れ籠のオレンジ  
 貰はるる子猫いとしみ抱いて月  
 体重増えてちよっと嬉しき  
 大鍋にたつぷり煮えしパエーリヤ  
 赤いマントのマタドール行く  
 水晶の恋占ひは吉と出て  
 対角線に走る流し目  
 宰相は自民社会を両天秤  
 夢を詰めたる旅のトランク  
 望の月庫裡より覗き円通寺  
 のそりゆず坊俺のことかい  
 親譲りどんじり走る運動会  
 道に絵を売るエトランゼたち  
 帰りなんいざ故郷は花盛り  
 雲丹弁当の蓋につく飯

瀧 川 雅 代 捌

雅代 昇格の噂しきりと四月馬鹿  
 あかり 株の値あがり願ふこの頃  
 啓子 免税でナポレオンなど惜しげなく  
 利子 ウェストン祭迫る稜線  
 和子 梅雨穴もぞりもぞりと黒きもの  
 弥子 女房知ってる僕の小細工  
 啓子 ドーランを落とせどゲイはなまめきて  
 利子 上物鮫鯨雌がおいしい  
 和路 神さびて廣大慈悲の熊野路へ  
 同路 老先生の矢立とる月  
 弥路 やや寒の病棟の灯の消えゆきし  
 和路 カート置かれる黄葉の園  
 弥路 ヨーグルトの中にもありぬナタデココ  
 和路 ささくれの指なめてゐる孫  
 利子 染見本紋はかげ紋かがり紋  
 和路 テレビ取材のカメラ廻りぬ  
 弥路 花ひらく並木の桜ニュータウン  
 和路 朝寝のひとの急ぎ足にて

利和和和利和弥利同啓路和路啓同利り弥和和和利

三 番 叟

寒のひと日あけを待たるる三番叟

ほのかに匂ふ初釜の炭

軒先にインコの籠を吊るしゐて

立ち話す常の顔ぶれ

浅川のゆるき流れに朧月

靴を濡らしてクレソンを摘む

知恵の輪のするりと抜けて仏生会

鈴ひびかせつ舞妓行き交ふ

かにかくに枕並べて睦みごと

個人輸入でベントツ贈りぬ

深山の杉千年の幹太く

秋のしぐれの過ぐる蟬塚

恩師より賜る酒に月昇る

思ひのほかの菊膾なり

対岸のロスを直撃大地震

ゼンマイ切れてピエロ動かず

うひ孫と夜毎眺むる揚げ花火

洗ひざらして透けるすててこ

好 淑 弘 水 安

敏 子 子 香 壺 子 香 安 香 淑 敏 弘 壺 淑 安 香 壺

極楽を念じ写経の五百卷

枯山水も猫のお厠屋

こんにやくを丘の鯨と言うて売る

九州場所はつけ出しの彼

もつれたる四十八手の指し違ひ

トリプルプレイでくすぐっちゃいや

やごとなき御方々に蚤の跡

土用芝居の幽霊の役

株不況たばこ産業未上場

夜荷解や呼べどみんな素通り

名月の八幡大社おごそかに

道灌の碑にすだくこほろぎ

故郷は葡萄酒醸す頃なりや

聞くCDはビートびんびん

食堂で品切れとなるカツカレー

卒業生の偉さうな顔

をちこちに花の嵐と花吹雪

出窓を飾る千代紙の雛

豊 田 好 敏 捌

弘 淑 同 香 安 弘 壺 弘 淑 安 香 安 淑 弘 壺 淑 安 香 敏 香

冬ぎくから

八角澄子捌

さざ波の岸に逢ひけり冬ぎくから

うなじを伸ばし眠る白鳥

膝前に聞香の盆廻り来て

玻璃戸を開けて子等の呼び声

残月に向ふ三軒路地を掃く

霧しつとりと吸ひし朝刊

新酒利く男の素顔生真面目に

シヤツの釦もはめてやる妻

ハネムーンやつと二人のヨーロッパ

円高差益下る口紅

山ッ姥の鏡岩まで造成地

幣ふる襦宜に正す居ずまひ

Jリーグ応援合戦月涼し

売れる浴衣の色豊かなり

缶入りのお茶にしゃべくる京女

じんわりと効く頭痛胃薬

花びらの降る庭下駄のあとさきに

つながれ犬にまとふ春の蚊

澄子

志げ子

道子

シズ

孝子

かりん

和弥

孝

ズ

道

弥

志

ズ

孝

志

孝

弥

道

ヨーデルの谷の罅に風光る

諜報部員越ゆる国境

首脳陣核の断絶お話し中

銀紙貼って作るくす玉

寒晒農婦は晴の日を選ぶ

肌もて解かん遭難の凍

煩惱を打つ警策の厳しかり

墨痕著く禁煙の文字

半生の哀歎尽きずビルの窓

ゆるゆる坂を急ぐ往診

伝へ聞く嫦娥は笑をこぼしつつ

秋<sup>ま</sup>狂言幟を立つる村の長

柱ばかりの朽ちてゆく墓

スーパリーのレジ日本語もうまくなり

午後の湯壺に浸る常連

城跡の石に枝垂るる花万朵

せどにはほのか亀の鳴く頃

孝かズ弥道孝志澄孝志道か志ズ孝か志澄か



冬晴れや

佛 洩 健 悟 捌

冬晴れや鳥影かろく横切れる

庭にひとと咲きし寒梅

掘炬燵オセロゲームのきりもなし

ポテトチップス音立てて囃み

くじ売の店仕舞ひして月昇る

道路拡張すめば新涼

立久恵の峽の吊橋つたかづら

頬すりよせるペアのバンダナ

止り木の端でささやく出産日

体温計の波のおだやか

ひたひたと極右台頭ヨーロッパ

歪みし月を裏滝で見る

見習ひの安居の僧の訛るて

やたらに殖えしのなら猫の数

超高層どこまで天に伸びるやら

畑仕事に背を丸めて

旅に逢ふひとへしだれの花八分

つがひの蝶の石組を越え

健 悟 杉 亭 惠 美子 冬 乃 元 子 正 江 媛 乃 惠 乃 元 媛 江 亭 同 媛 亭 江 元

春泥に乳母車押し遠会釈

陳情署名客からも取り

古版画に「時」の大鎌ふるふ神

煙草はどうぞ喫煙所にて

目出帽に薄れ切ったる髪隠し

ゲレンデに舞ふ一級の腕

バーボンをツーフインガーとウイंकクし

うす紅色の闇のともしび

伝統の寄木細工を照らす月

骨養生に鮭の中骨

通訳をつけて相撲のインタビュー

親孝行は外国が勝ち

籠枕櫛風沐雨七十年

烏龍茶より今は杜仲茶

広報のお知らせにのる自由市

集会場に喇叭流れて

護り来し堤は花の盛りなり

絵舩かかげて走りゆく子ら

亭 惠 元 同 乃 媛 元 乃 媛 乃 惠 悟 江 亭 乃 媛 惠 悟 乃

# 馬追

付勝練習二十韻

東明雅

切句締日  
4月20日

ふるさとや馬追鳴ける風の中

撫子残る月代の道

秋深し篆書一幅書上げて

ゴルフのクラブ磨く縁先

ウ  
向ひ家の大戸を開き婚の使者

黙しがちなる娘の髪を結ぶ

付

治定 何もかも洗ひ流して夕立去る

佳作1 甘酒は大好物とおかはりし

同 2 ものみなに赤富士のかげ映えてゐて

同 3 莖漬くる天秤樽の塩吹きし

同 4 長かりし夏の休みも半すぎ

同 5 思惑の外と混みあふ宵戎

同 6 巴里の空おもへば胸の熱くなり

同 7 釜たぎる音敵しかり初点前

同 8 好物の枇杷が届いて仏前に

同 9 啄みつ群れて弾みて寒雀

同 10 愉快犯の放火魔遂に逮捕さる

同 11 縁側に並んで二人日向ぼこ

同 12 この町の河童祭も近づきぬ

秋桜子

達子

よしえ

遊

和弥

文子

美子

研三

守英

遊

智子

鋭太郎

達子

文子

妙子

智恵

千雪

富子

栄子

※前句と直接の関係はない。強いて言えば、時節の付けであらうか。しかし、予想外に賑わう宵戎と、何か心にわた

かまりをもって物言わぬ娘、その付合には意外性がある。

6、これも③、前句の人の思いを付けた其人の付け。一

巻の雰囲気をかえようとする意図がうかがわれ、付味も悪

くない。ただ、1と同様、そう考えているのは母なのか、

娘なのか曖昧である。

7、打越の婚の使者を迎えた緊張感と、初点前にのぞむ

気持とは、何か通うものがありはしないだろうか。

8、この句は前句の母の其人の付け。その母の人柄をし

のばせるよい付味の句である。最初はこの句を治定しよう

と考えたのであったが、何か打越からの転じが今一步なの

で取りやめた。形も何か似ており、気分も変わっていない

ようである。

9、この句も③、七名で言えば其場の付け。前句の庭前

の状景であらうか。前句のやや沈んだ状景に対して、寒雀

が群れて飛びはねている景色は、気分的にはまる反対であ

るが、それでうまく付いているのである。ただ、打越が庭

前の景であったので、ここでまた庭前の句を付けるわけに

はいかないであらう。

10、これは時事の句、つい最近、無責任な放火によって

一家五人焼死というショッキングな事件があった。時事の

句を取りあげるのは結構であるが、前句との付味がいかか

であらう。

11、縁側は大打越に縁先があり、同字三句去りの式目に

同 13 夏燕せつせと雛を育てゐて 美和

同 14 知らんふり聞耳立てる炬燵猫 道子

同 15 卓上に君影草の鉢ひとつ 信子

同 16 ほかほかの今川焼をお土産に 節子

同 17 御器囃のやたらに増えし昨日今日 敬子

同 18 簡単にすませて昼の冷素麵 郁子

同 19 白菜を洗って切つてキムチ漬 ひろみ

付句には大体三つの付け方がある。①は前句に直接関係のあるものを付ける。②は前句の気分、余情によすがを求めて付けるもの。③は前句と全く関係のないものを付ける。この三つである。

佳作1、これは右の三つの付けのうち、①と思われ、前句の人の嗜好を述べた、七名の其人の付けであるが、肝腎の甘酒が好きなのは母か娘かはつきりせず、その点、考えべきであろう。

2、これは③で通句・遣句の手法。七名で言う其場の付け。前句の何か鬱屈した気分と通うところがあり、また打越からの転じも十分である。

3、一句の意味がはっきりしない。この句を読んで、京都の酢茎をつける工場を連想したが当っているだろうか。ともかく、其場の付けであり、付味は悪くないと思う。

4、これは前句の娘のその人の付け。夏休みが終りに近づいて何か憂鬱になったのか、黙しがちになったという。このような付けを心付というのである。

5、宵戎は一月九日、初戎の前日である。これも③で、※

反する。

12、これは③、時節の付けである。付いていないわけではないが、大味である。

13・14、いずれも③の其場の付け、これらも付いていないわけではなく、特に14はちよつとおもしろいと思う。

15、君影草は初夏の花鈴蘭の別名である。これは明らかに前句の娘の心象風景である。それだけに前句にはよく付いており、むしろ付き過ぎの感もある位である。

16、この句、前句との関係が問題である。付心が分からず、付味も悪い。

17、③の通句、これも其場の付け、付いてはいるが大味である。

18・19、いずれも①の其人の付け、いかにも前句の母娘の生活・感情を表現して、よい付けである。ことに19は、育ち盛りの娘を持って人知れず苦労しているらしい婦人の生活を別の面から描いている。軽い句であるが前句とあわせて読むと、いかにもかいいい、健気な主婦の像が浮かび上がる。

治定の句は③の付け方。通句・遣句である。七名で言えば天相の付け、この一卷第三あたりから、何か家の中でこちゃこちゃやっている景が続いた。そのもたもたしたところをこの句によって断ちきるため、8とか、18・19と言ったよい句をあきらめて、この句を治定することにした。捌きのこの心を酌んで、次の句を考えて欲しい。夕立は三夏・この句はもちろん人情なしの句である。

うららら会

源心四巻

平成六年一月二十一日  
於 横浜 上郷森の家

初懐紙

東 明雅 捌

鎌倉は梅が満開初懐紙

飾納めし蕙貴の家

挽立ての珈琲高く香るらん

テレビガイドは見開きのまま

微笑仏顔にかすかな月の射し

身にしみじみと肌のぬくもり

菊枕想ひのほどの大きさに

始発電車で帰る残業

サービスは銭にならないことばかり

子づれ狸が六匹も出る

国会の議員食堂輸入米

麦踏みことも忘れられつつ

花盛り待てずうからの「斗瓶取」

雲雀飛び交ふ紺青の空

ナホ 湾岸に穹型の橋望み見る

アラブの国に石油成金

メルセデス・ロールスロイス・クライスラー

ほかほか弁当二十四時間

生涯の尺蠖虫の生活圏

白装束の富士行の月

うっかりと惚れた相手は雪女

風呂場で覗く嫂の乳

二等辺三角形を証明し

学舎はるかセピア色なり

オチ そのかみの全共闘も皆白髪

鶯餅の味のほどよき

みちのくは石割桜花万朶

忘れられたる春の手袋

雪もよひ

式田 和子 捌

連衆と嬉しき旅や雪もよひ

早梅の香の匂ふコテージ

一ダース色鉛筆を削りゐて

受話器そのまま用件を聞く

病抜けし孝夫を見んと並ぶ月

妹背鳥縫ふ帯をゆるくし

鈴虫も恋の鈴振る籠の中

理屈達者になりて来し孫

国会の賛否両論頂点へ

妙法連華深く浸透

手拭を腰につるして冷し酒

トレニングは競艇のため

ポトマック河畔変らず花の影

オチ 子猫ひっそり捨てられてゐる

宝籤当りたる夢朝寝して

悪魔てふ名の自由不自由

木枯にムンクの叫び混り居り

炸烈音の暴走車行く

砂浜で裸足まばゆくからみあひ

灼くる思ひよこれジェラシー

漫画読む時間つぶしの喫茶店

黒梓に見る知人うそ寒

火祭の天に昇りて月翳り

幹事の配る鮭の弁当

オチ 想ひ出はひとつひとつのほろ苦く

姉を呼ぶ声姉に似てゐる

接木して幾代も花を保つ技

カメラ構へるのどらかな昼

久 和 同 イ 久 信 和 信 久 イ 信 廣 信 久 廣 イ 信 イ 同 久 信 廣

# 初景色

杉江 杉亭 捌

満目の蕭条たるや初景色  
 福草章置くフロントの脇  
 駅前のカルチャーセンター人群れて  
 代返上手いつも頼まれ  
 かくれんぼまだつづきある月の路地  
 色なき風のさつと過ぎゆく  
 糸車まはせばきしむそぞろ寒  
 民芸館でちらと似し女  
 付け文も時効となりしクラス会  
 ゼネコン汚職汗の吹き出し  
 改革は左団扇ぢゃ通りゃせぬ  
 欠呻する犬そっぽ向く猫  
 法話説く庵主横目で花を賞で  
 木の芽田楽大皿に盛り  
 橋桁に春の渦潮ぼっかりと  
 手帳と眼鏡下駄箱の上  
 石畳ホームズさんの家訪ね  
 樽に賭けたるマイスターなり  
 雪女郎杉の根元に蹲る  
 融けてはかなき後朝の頃

子の継がぬ老舗葉屋蔵造り  
 頑固一徹これが身上  
 県境またたび採りで迷ひ込み  
 見上ぐる月に出るは溜息  
 戦没者名簿を捜す終戦日  
 しんこ細工の順番を待ち  
 權彌宜の御弊にかかる花の片  
 鮎放流の便り続々

初懐紙  
 豊田 好敏 捌

初懐紙空冴えわたり森の家  
 日脚伸びたる山の小道  
 マージャンの卓に緑の羅紗張りて  
 お利口さんの猫さすりやる  
 ままかりの鮓を持ちくる隣り人  
 美男寡の簪の揺れ  
 空港で肩を寄すれば斜め月  
 お式の前に済ます入籍  
 アンチック机の疵に想ひ馳せ  
 蠟燭の火に描く自画像  
 一遍の踊り念仏に紫雲湧き  
 庭の噴水しぶき高々

花水謁見の間の片隅に  
 おかっぱ乗せた自転車を押す  
 指笛をたくみに鳴らす異邦人  
 学資稼ぎにビルの窓拭き  
 はやばやとバレンタインの品選び  
 厩出されて気負ふ種馬  
 春泥をつけし農夫の朝帰り  
 老刀自びくと眉根動かす  
 般若面打つ指先のあかぎれて  
 コップに溢る酒に寒月  
 唾吐いて出場停止ジーコ去る  
 運も不運も神のみぞ知り  
 書道展師匠ゆづりの強き線  
 曲奏でも音はづすまま  
 囀りの川辺にやさし花筏  
 風船売りの店しまふ頃

今般、伝道書を貰われた方々の外に  
 左の方々を猫婁会同人として推薦致し  
 ます。

加藤 治子(ころも連句会)
杉山 寿子(桃 雅 会)
武村 利子(同 右)
吉田 憲助(電通連句部)
山口 美江(同 右)
青木 秀樹(同 右)

柏連句会

二十韻 三卷

平成五年十一月十二日  
於 柏市光ヶ丘近隣センター

冬の日 下鉢清子 捌

年の暮 五十嵐讓介 捌

橙 中田あかり 捌

鳴るたびに冬の日の減るししおどし

ひとときを鳥と遊ぶや年の暮

郁子 橙の光ヶ丘にたわわなり

安子

雪囲ひして静もりし村

明雅

蕾もたげし庭の水仙

正江

注連飾りすみ翹ふひととき

達子

大鍋にスーブの素を煮立たせて

庸子

床の間に刀堂々飾られて

京子

鉄鍋に匂ふシチューの蓋取りて

良弥

お誕生会プレゼント持ち

一恵

よちよちの子の猫の後追ふ

讓介

下校の児らのにぎやかな声

正敬

赤い羽根胸につけたる月の人

雅

十六夜英語教師のひまもなく

江

願かけの格子月射す文殊堂

同

愛染堂で待ちしやや寒

庸

どぶろくちびりチャタレイ翻訳

江

盆に逢はんと言ひしあのひと

同

見つめ合ひ会ひたかったと菊の酒

恵

掌にのせし忘れ扇の香りくる

江

初獵にいでて知りたる柔き肌

弥

山の端の上とんび輪をかく

同

江悠々と蘇州城外

京

ゆらりゆらりと不況底無き

同

Jリーグ根拠地移すが騒ぎにて

清

大道芸曲乗り奇術船細工

郁

シャンソンを歌ふ陽気な銀行マン

安

すったもんだの米の関税

雅

しゃがれ声して低音のひと

江

デートリッヒの記憶うすれる

弥

特等の世界一周夢のごと

庸

龍安寺配置肯なふ石の妙

郁

でで虫よ汝に家あり我になし

達

聖ヨハネ祭ふかすダンヒル

雅

蹲居の月くづす滴り

同

土用灸の仔細見る月

安

錦鯉バイオの餌で肥る月

恵

減税に選挙改革ままならず

京

裏通り夢といふ名の酒場あり

敬

木乃伊となりし樓蘭の美姫

同

妻が偉すぎ目立たざる夫

郁

抱いてしまった親分のレコ

達

閨の中しのび笑ひの洩れて来る

庸

夢の中美女押し倒しはがひじめ

江

FBI心中沙汰も機密とし

敬

すっからかんになりしポーナス

雅

「ねじ式」といふ漫画傑作

介

記号の海に漂へる街

達

ララ物資戦後もすでに半世紀

恵

退院を告げられ駄々をこねる爺

江

もの忘れ眼鏡財布に保険証

同

孫八人に子猫八匹

雅

身欠鯨を甘辛に煮て

同

清明節に小鼓を打つ

安

花の宴島の大橋完成し

庸

住宅のローン完済花吹雪

介

盛りなる花の名所の旅程表

り

色とりどりの風船の飛ぶ

恵

春田の向ふ山の連なる

京

菜飯さみどり炊き上りたる

弥

(連句会案内)

雁帛往来

●連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時  
会場 江東芭蕉記念館  
江東区常盤一六〇三

●柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時  
会場 光ヶ丘近隣センター  
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地  
マーケット下車)  
(電) 三六三一―一四四八

●A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四土曜  
午前十時～十二時  
会場 新宿住友ビル四十八階  
朝日カルチャーセンター  
(電) 三三四四―一九四一(代表)

●猫養会(会員制)年四回

会場 江東芭蕉記念館  
江東区常盤一六〇三  
(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)

(電) 三六三一―一四四八

▽十二月三日 湯島に関森勝夫氏を迎え会食。五吟で連句を巻く。

▽十二月四日 抱虚庵八世実郎宗匠の襲号披露、深川富岡八幡に行く。

▽十二月五日 深川芭蕉記念館の連句教室出席、会者十九名。三卓で「源心」興行。

▽十二月六日 季刊連句43号発送。  
▽十二月七日 角川書店「俳文学大辞典」の原稿校正。

▽十二月十日 上野韻松亭で荒木忠男氏ウアチカン大使赴任を祝って二十韻を巻く。

▽十二月十一日 A・C・C。上野で所山花氏を迎え会食。

▽十二月十三日 柏連句会に出席。会者十三人。三卓で興行。

▽十二月十六日 電通連句部に出席。

▽十二月十八日 歳旦三ツ物を作り、賀状に書いて出す。三ツ物を作るのは今年が初めてなり。このところ、書斎の床を貼

りかえる工事続き、二階の寝室で仕事。  
▽十二月二十日 伊豆旅行、加藤慶二先生

一行に加わり熱海潮音閣に一泊。

▽十二月二十五日 江戸川医師会館の句会「鶴の会」に出席。

▽十二月二十六日 「芦丈翁俳諧聞書」の校正をする。

▽十二月二十七日 「ねこみの通信」の原稿を書いて仏淵健悟氏に送る。

▽十二月二十九日 書斎と居間の床張り替え終る。荷物を移し、これで新年を迎える準備も完了する。

季刊「連句」第四十四号

平成六年三月一日発行

編集人 東 明 雅  
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二 東方

電話 〇四七一(七五)一一九二

振替口座 東京七〇五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六〇一

電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共  
一年 二〇〇〇円 送共

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判  
三五二頁  
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使える  
本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思ひなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鷗沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円  
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円  
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円  
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円  
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一八〇〇円  
国語学会編

国語慣用句大辞典 白石大二編 A5 八〇〇円

国語慣用句辞典 白石大二編 B6 二二〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B6 三五〇円

日本語語源辞典 堀井幸以知編 B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 軍編 B6 三〇〇円

隠語辞典 樺垣 実美編 B6 一八〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 藤井 宗昭編 B6 三〇〇円

新語新語俗語辞典 榎島忠夫他編 B6 三八〇〇円

難訓辞典 中山 泰昌編 B5 三〇〇円

名乗辞典 荒木 良道編 B6 一八〇〇円

名数数詞辞典 森 睦彦編 B6 四二〇円

あいさつ語辞典 奥山 益朗編 B6 一八〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木 繁三編 B6 五八〇〇円

類語辞典 鈴木 広田編 B6 一八〇〇円

類義語辞典 徳川・富島編 B6 三〇〇円

新版 文章表現辞典 藤原亨一他編 B6 四八〇〇円  
神島・村松編 B6 一九〇〇円

東京堂出版

101 東京都千代田区神田錦町3-7

電話 03-3233-3741~2